紙芝居の広がりにふれる旅

●●● パリ、リヨン、アントワープ、そしてアムステルダムを訪ねて ●●●

長友恵子

昨年の十一月二十一日、パリの日本文化会館で、非営利組織「小さな丸い図書館」主催、ジュリアン・マレシャン館長の司会で、「紙芝居学びの日」シンポジウムが開かれました。

酒井京子紙芝居文化の会代表の基調講演「紙芝居の理論と歴史」でシンポジウムの幕が開き、野坂悦子海外統括委員の講演「海外における紙芝居の実践」が続きます。その後、文化の会の運営委員が紙芝居四作品を、日本語で演じました。演じる前にフランス語で概略を説明した作品もあり、集まった参加者には、紙芝居の持つ意義、おもしろさがしっかりと伝わっていました。『よいしょ　よいしょ』（脚本・絵／まついのりこ）を上演した際には、会場全体が、日本語の「よいしょ」のかけ声に包まれました。言語を超えた交流が実現したこの光景に、紙芝居が持つ共感の力を実感しました。

フランス側の登壇者からは、子ども達が自分達で紙芝居を作る活動も盛んだという報告がありました。フランスで紙芝居が今後どういう展開を見せていくのか、楽しみです。

シンポジウムの最後に、ミシェル・ヴァランティーヌ「小さな丸い図書館」文化活動責任者が、『ごきげんのわるいコックさん』（脚本・絵／まついのりこ）を演じました。紙芝居文化の会がフランスで紙芝居活動を始めてから約二十年。その成果の集大成のような見事な演じ方で、会場は大いに沸きました。

翌二十二日朝、リヨンへと移動し、公共図書館で司書や紙芝居活動家を対象に紙芝居講座を持ち、続く二十三日には、別の図書館で、子ども達を前に上演し喜んでもらいました。付添いにお父さんの姿も多く、イクメン文化の浸透ぶりを垣間見ました。

その後、アントワープへ向かい、地域にある全図書館を統括し、生活支援センターでもあるペルメーケ図書館で講座を開きました。参加者の中には、紙芝居理論の著作があり、各地で紙芝居の演じ方を指導しているインゲ・ウマンスさんの姿もありました。館内には紙芝居の常設展示コーナーがあったのですが、舞台付き自転車も置いてあり、貸出バーコードシールが貼られていました。学校などに貸し出されているとのことで、日本との違いを感じました。

最後の訪問地はアムステルダムです。郊外の小学校で紙芝居の実演をしました。日本語で演じても、子ども達はじっと集中して見入ってくれて、これが共感の力かと再認識しました。

各地で、紙芝居が大好きな人達と出会い、大歓迎された旅でした。日本独自の文化である紙芝居が、人種、国境、言葉の違いをこえて、こんなにも愛されているなんて、個人的にも、励ましになりました。演じ方の統一という課題も感じましたが、子どもに限らず、大人まで結びつける共感の力に、明るい未来を感じた今回の旅でした。

（ながとも　けいこ／翻訳家）